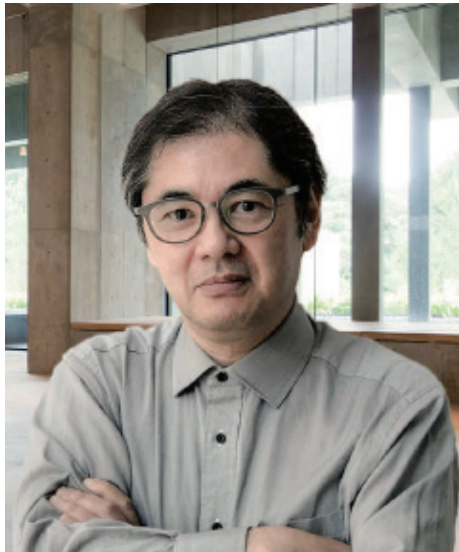


新型コロナウイルスにより もたらされる新しい社会に向けて

with, after そして next Corona

NIKKEN
EXPERIENCE. INTEGRATED

建築



山梨 知彦

[やまなし ともひこ]

日建設計
常務執行役員 チーフデザインオフィサー

1986年 : 日建設計入社
2015年 : 常務執行役員
2020年 : 同上 チーフデザインオフィサー
木材会館、ホキ美術館、長崎県庁舎などのデザインを経て、現在は大規模複合建築を担当。NBF大崎ビル（旧ソニーシティ大崎）と桐朋学園大学調布キャンパス1号館にて二度の日本建築学会賞（作品）を受賞。

本件についてのお問い合わせ先
日建設計広報室 03-5226-3030 webmaster@nikken.jp

コロナに対する鮮明な印象が残っている with Corona の今こそ、after Corona の建築や都市、そして next Corona（以下、単に with、after、next と表記）を考える最適なタイミングかもしれません。ここでは未来を断定するのではなく、想定できる複数のシナリオからそこに共通するものをあぶり出し、その備えを考えるというアプローチで、with、after、そして next の建築や都市の計画やデザインについて考えました。

コロナに学び、その後を考え、備える

「コロナの後に何が起こるか」、多くのことが語られています。もっともらしく聞こえるものもありますが、根拠無く断定されたものも多そうです。

コロナの教訓は、「先のことは、誰にも断言できない」ということで、将来を予測することはギャンブルのようだと言えそうです。人は惨事を目の前にするとその先も悪い方向に考える本能、ネガティブバイアスを持つと言われていきますから、with に将来を冷静に予想することは、至難の業と言えそうです。

むしろやるべきは、シナリオプランニングの手法のように、将来に起こりえる事態を想定し、そこから現在の知恵では対応が難しいものを見出し、準備をしておくことではないでしょうか。例えば、

- この with に学び、想像力を働かせ、
- after に起こる複数のシナリオを描き、
- 起こりえる「共通項」を見出し準備する
- さらには、コロナ後の新たな脅威、next の「リスク」の中から、
- 発生確率が低くとも、影響力が高いものを特定し準備する

これができれば、最悪の事態を回避できるかもしれません。ネガティブバイアスを利用して適切にシナリオを想定できれば、「共通項」に注力しつつ、「リスク」に余力を回せるため、悪戯な予測に振り回されて疲弊することは避けられそうです。

共通項を探し出す

シナリオプランニングを使って、after の共通項が炙り出せないか考えてみましょう。例えば、



木製のバルコニーが内外の環境をつなぐ：木材会館
写真：野田東徳 / 雁光舎

after のワークプレイスを考えてみます。with では多くの人が在宅勤務や Web 会議を経験し、リモートワークのリテラシーは一気に高まりました。しかし、こうした状況を見て直ちに「オフィスは不要になる」などと結論付けてしまっただけは、正にギャンブル。未来を断言するのではなく、起こりえる複数のシナリオを描くことが大切です。このケースでは以下のシナリオが描けそうです。

- after では、在宅勤務がメインになる
- 反動によりフェイス トゥ フェイスの交流が重視され、よりオフィス志向が広がる
- いやいや、適材適所で、職種や業態により2つのワークスタイルが混在する

次に、これらのシナリオの共通項を探します。浮かび上がるのは、今後はオフィスも住宅も仕事場になり、どちらもワークプレイスを必要とする状況です。さらに、それらが Web 会議システム等で相互に接続されなければなりません。言い換えれば、オフィスにも住宅にも、Web 会議を利用するワークスタイルを受け止められる新しい空間、技術、設備が共通項になるわけです。さらにこの中から、建築や都市で対応し解決

した方が適切な項目を洗い出しデザインすることが、今、すべき準備になります。

予測困難な時代に、どうやって建築や都市をデザインするのか？

対象を都市や建築に広がります。実はコロナ以前より、世の中の価値観は多様かつ複雑化し、予測の難易度は上がっていました。予測が困難になりつつある以上は、マスタープランを設定してそこへ進むこれまでの計画論に加えて、未来との向き合い方を持った建築や街づくりの手法を用意しなければなりません。



周辺とつながる動線が、そのまま内部空間を貫く：長崎県庁舎
写真：野田東徳 / 雁光舎

その一つとして、都市や建築の完成を建設完了時に置くのではなく、完了後も状況を観測し必要な微調整を繰り返しつつ、年月をかけて既存の都市の中にしっかりと座るように軌道修正を加えていく考え方ができました。その萌芽は1960年代に書かれたジェイコブスの『アメリカ大都市の死と生』に遡れそうですが、最近では超高層建築などの大規模開発においてもそういった傾向が顕在化しています。特定街区制度を利用し超高層ビルに都市計画を掛け直すといった大胆な事例もあります。

こうした微調整の繰り返しによる軌道修正型の建築や都市づくりを実践するためには、建築や都市の状況をリアルタイムに把握する技術が必要です。幸いなことに、デジタル技術の発展が役立つ状況になっています。新型コロナに関して携帯電話情報を使った感染者の行動

把握の技術が、近い将来に建築と連動し、複雑な制御を建築に加えることができる日は近く、これが共通項となりそうです。

next Corona のリスクに備える

シナリオプランニングが教えてくれるもう一つの重要な視点は、「可能性は低いものの、もし発生すれば重大な影響を引き起こすこと」の抽出と準備です。考えてみれば、3.11も今回のパンデミックもすべて想定外でしたが、実際に起こり、大きな衝撃をもたらしました。こうしたリスクに対する準備も「共通項」とともに重要です。

デジタルに深く依存する「新しい日常」での最悪のリスクは、我々が頼りきっているデジタル情報インフラの停止や崩壊です。携帯電話やインターネットが全く作動しない世界です。モビリティが AI や IT により自動操縦され、建築や都市が IoT により最適制御され、あらゆる社会活動のベースがデジタルデータとなった近未来で、デジタル情報インフラが崩壊した悲惨さは、想像を絶するものとなるでしょう。

当然このインフラ自体は、多重化、冗長化、自律分散化が図られていますが、リスク管理の視点からは、これとは全く異なる「系」のバックアップを持つことです。建築でいえば、自動制御が停止しても人手で操作できることや、自然の光や風が得られる開口部の確保といった、アナログかつプリミティブでルーズな側面が、next へのリスクヘッジになるわけです。皮肉ですが、デジタル化が進むほど、アナログ的な「ゆるさ」が不可欠になるわけです。

建築をひらき、つなぐ

それでは、「共通項」と「ゆるさ」を持ち、微調整による軌道修正をも受け入れられる、建築や都市のデザインは、どういった方向に向かうべきでしょうか。

近代建築の源流である摩天楼は、照明、空調、昇降機といった、「人工」の技術が実現し、その完璧な制御を目指して発展してきました。その結果、現代建築の多くが、外部から遮断された閉鎖空間となっています。しかし



バイオスキンで大型建築と環境をつなぐ：
NBF 大崎ビル
写真：野田東徳 / 雁光舎

with の中での三密の回避を経験し、そこに3.11 直後の計画停電時における経験を重ね合わせれば、今後の建築の外装やエントランス回り、地下鉄駅などを相互につなぐ公共通路で、今後考慮すべき共通項は、日本古来の建築に学び開放性を高め、外とゆるくつなぎ、自然の光や風を取り入れることになると思います。

実は Corona 以前から、建物の外装を開いたり、アーバンコアにより複数の建物をつないだり、時間の経過とともに軌道修正を受け入れ、形を変えていく外装やつながりを持ったデザインを試みてきました。

インターネットは日常となり、IoT で建築が接続され始めました。さらに物流がマターネットと重なり、自動操縦化されるモビリティがそれを加速する状況が迫ってきました。デジタルのみならずモビリティやマターネットともネットワーク化され、同時にリスクヘッジも兼ねて外部環境に開かれた建築タイプの登場と、その軌道修正により建築や都市づくりを行う、といった新時代の都市と建築の共通項が見えてきたような気がします。（拙著「切るか、つなぐか？ 建築にまつわる僕の悩み」TOTO 出版、参照）

after がいつ訪れるのか、私自身が一番腑に落ちたのは「それは、医学的に新型コロナウイルスが駆逐された時ではなく、人々が恐怖心を感じなくなり、ウイルスの存在が日常になったとき」との説明でした。恐怖心をまだ忘れていない with の今こそ、next についてリアルに考える貴重な機会と感じています。